

**特集** **少女の目に生きて**  
 ～短歌がむすんだ献眼への想い～

愛媛アイバンクにおける献眼数は1年あたり10眼～20眼程度で、最近では減少傾向にあります。献眼登録者数は約13,000人と、全国的には決して少ない方ではありませんが、登録されているご本人が死亡された際、ご家族からの連絡は、ごく一部の方に限られているのが現状です。今回は、ご家族の方による献眼がもとで生まれたご縁を、愛媛であった実話をもとに物語にまとめました。ご家族みんなで読んでいただければ幸いです。

2

わかりました。調べさせていただきます。

日本アイバンク協会から情報の提供があった。

毎年「全国短歌フォーラム in 塩尻」に、全国から沢山の作品が投稿されている。

この短歌は平成22年の最優秀作品で、作者は香川県坂出市在住の「山地みささ」さんであることが分かった。

愛媛アイバンクでは書の写真を山地さんに郵送した。

数日して、山地さんから手紙が届いた。一度、松山に行き山澤さんとお会いしたい。

献眼をご縁にした、お二人の出会いを実現したい。

平成23年11月某日 松山道後

3

**少女の目に生きて**  
 ～短歌がむすんだ 献眼への想い～

愛媛アイバンクに1本の電話がかかった

道後の山澤と申します。短歌を額に表装した書があり、アイバンクに寄贈したいのですが…

この物語は実話にもとづいています。

ありがとうございます。ごさいます。

実は24年前になりましたが甥が交通事故で他界しました。だれかの眼になって生きてほしいとの願いから献眼をしました。

その後、臓器移植のニュースとか、毎年送っていた「愛媛アイバンクだより」で、甥が献眼したことを思い出していました。

数か月前、テレビ番組で「君の眼は二人の少女の目に生きて何処かで今年のさくら見てるよ」という短歌が紹介されました。

「献眼」のことを詠んだ歌であると直感し、急いでメモをとり「書」にしました。作者を知りたいのですが…

山澤さんは「かな文字」の女流書家として文芸活動されている

4

時の経つのも忘れ話は尽きなかった。

「君の眼は二人の少女の目に生きて何処かで今年のさくら見てるよ」

この短歌は山澤さんの書で愛媛アイバンク事務局に掲げられている。

3

手を取り合うお二人はまるで、旧友に再会されたような雰囲気であった。

昨年、28歳の甥が亡くなりました。家族は誰かの眼になってこの世で生きていくのならとの想いで献眼をしました。

そうでしたか。24年前の私の場合も同じでした。

その時の想いを短歌に詠みました。

山地さんは香川県の歌人で文芸活動をする傍ら、目の不自由な方々へ朗読を収録したテープを配布するボランティア活動に参加されている。